

令和 元年 9 月 25 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880154

氏 名 鯨岡 さつき

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 レーゲンスブルク (国名 ドイツ)
2. 研究課題名 (和文)：18・19 世紀のオーストリアにおける言語的標準化一言語実態と言語意識の観点から
3. 派遣期間：平成 30 年 9 月 15 日 ~ 令和 元年 8 月 31 日 (351 日間)
4. 受入機関名・部局名：University of Regensburg, Department of German Philology
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

今回の研究滞在では、博士論文の完成に向け、分析対象とする資料の充実と理論的枠組みの強化を目ざした。資料 (分析データ) 収集は、レーゲンスブルク大学およびオーストリアのウィーンの公文書館で行い、次の3つの重要な資料に行き着いた。1点目の資料は、18世紀ウィーンの宮廷官房官で侯爵の Khevenhüller-Metsch の日記である。彼の日記は歴史学においてマリア・テレジア治世下の宮廷の様子を伝える資料として知られているが、いまだ言語学の観点から調査が行われていない。歴史学者によって活字版が出版されているが、その本が手書き資料で綴られた文字通りに活字化されたかについて、現在の日記の管理者である Bartholomäus Khevenhüller-Metsch 氏に直接許可を取り、ウィーンの国立公文書館にて照合調査を行なった。その結果、報告者が調査したい面 (正書法と語形) については文字通り活字化されていることが確認できた。2つ目の資料は、18世紀を生きたザルツブルクの聖職者 Dominikus Hagenauer の日記である。この資料も活字版が出版されている。しかし、これが言語史研究で資料として使われた例は管見の限り存在しない。さらに3つ目の資料として、レーゲンスブルクで行われた帝国議会 (1663-1806 年) の記録も、今後の博士論文の資料として使用可能であることが判明した。以上3つの資料について引き続き調査を続け、最終的には博士論文を完成したいと考えている。博士論文の理論的土台としては、さまざまに検討した結果、言語的異形に関するコーパス分析法のほかに、言語管理理論を適用することに決定した。なお、18・19世紀のオーストリアにおける言語的標準化に関して、今回の滞在期間における研究成果の一部を鯨岡 (2019) として公刊した。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

研究成果の発表については、前述の通り1件論文を出したのに加えて(鯨岡(2019))、さらに来年度前半までに3つの発表の場を考えている。まず、コーパス資料の一つであるウィーン新聞について2018年冬学期ゼミにおいて研究した成果を、『学習院大学ドイツ文学会研究論集』(2020年3月刊行予定)において発表する予定である。次に2020年に開催される研究会(ひと・ことばフォーラム、三宅和子教授(東洋大学)主催)において、今回収集したKhevenhüller-MetschおよびHagenauerの日記の言語使用についてパイロット調査の結果を報告することを目指している。さらに2020年6月開催の日本独文学会春季大会に口頭発表を申し込み、前述の日記の言語使用についての調査の中間報告を行うことを予定している。

今後の計画としては、まず、今回の滞在で収集した資料をもとに、コーパスの作成・調査を進め、博士論文の骨子となる、18・19世紀オーストリアおよびドイツの言語使用に関する分析結果を得ることを目指す。そして、2020年度夏以降に再び来独して、レーゲンスブルク大学においてRössler教授の下で、3年内に博士論文を提出することを目指している。レーゲンスブルク大学で博士論文を執筆することについて同教授の同意を得ることができたのは、今回約1年間の滞在中を通して、Rössler教授と博論の計画についてじっくり回を重ねて話し合えたことが大きな要因になっていると考えている。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラム中に得られたことは主に以下の3点である。

まず第一にコーパス資料をはじめとした物的資源である。先述の通り、博士論文で使用予定の3つの資料についてドイツおよびオーストリアにおいて収集を行った。

次に、ドイツ語圏における人的ネットワークである。留学先であるレーゲンスブルク大学のドイツ語研究者とは複数回の研究会などを通じて随時交流を行い、報告者の博士論文の計画について、様々な観点から意見、提案をいただくことができた。また学外の学会にも積極的に参加し、そこでも多くの研究者と関わりを持つことができた。2018年9月の都市言語史学会(ドイツ・ヴュルツブルク大学)では口頭発表をドイツ語で行い、発表内容について示唆に富んだコメントを多数いただいた。2019年5月の18世紀のドイツ語史に関する研究会(ドイツ・アイヒシュテット)においては、私と同じく18世紀オーストリアのドイツ語史についてすでに博士論文を書き上げたAnna Havinga氏(イギリス、ブリストル大学)と研究テーマについて複数回やり取りをすることができ、今後の博士論文執筆に対する更なるモチベーションを得ることができた。なおいずれの人的ネットワーク形成においても、研究指導者のPaul Rössler教授には掛け橋的存在として厚く支援していただいた。

さらにまた、ドイツ語圏の言語使用および現代事情について知識を深めることもできた。私にとって今回の滞在中は初めての長期留学であり、学部生時代から学んできたドイツ語およびドイツの現代事情について、実地で長期間かけて見聞を広める初めての機会であった。ドイツ語を教える職業を目指している私にとって、今回実地での生活を通して学んだドイツ語やドイツの文化は、将来の授業に有用な知識、経験であると言える。今回の滞在中は博士論文執筆にとってだけでなく、研究者・教師としての私の今後のキャリアにとって、かけがえのない経験になった。